

高船新聞

創刊號

四月十五日發行
毎月十五日發行

發刊の辭

進行しつゝある民主主義革命の波動は、從來讀された世界としてあつた吾が學園の固い扉をも、すでに音高く洗はうとしてゐる。そして古きものは滅び、眠れるものは目覺め、虐げられしものは起ち上り、まさに自由の鐘は鳴らうとしつゝある。遅くはあつたが今にして我々は、稱ふべき青春の自我を發見し、歌ふべき生の躍動に目を見開いたのである。自由を我等に！然し鎖を切つて大海に放たれた船の自由が沈没することの自由でもなく、漂流することの自由でもないと同様、我々の自由もまた怠けることの自由でも、裏切ることの自由でも、頽廢することの自由でもない筈である。我々の求むべき自由はすぐれて、非人道に對する人間性の、不正に對する正義の、虚偽に對する眞理の自由でなければならず、従つてそれは自由のための自由ではなく、かく限られることによつて却つて無限の高さを持ち、下からの秩序に支へられた合理的自由である筈である。本誌もまたかゝる自由の擁護と實現のために生れたものに外ならない。隱忍と沈黙が美德とされたのは軍國的封建的壓制の下に於てであつた。然し今や我々は自由の爲に思索し、批判し、そして堂々と發音し言挙げしなければならぬ時である。かくてのみ學徒としての權利と義務を完うし、祖國再建を荷ふ國民として、また海員として如何にあるべきかをつぶさに學び取ることが出来るであらう。本誌はあくまで我々のものである。千四百の健兒あまねく來り投ぜよ。而して本誌を我々の自由への若くして逞しき窓たらしめよ。

まづ知らしめる爲に

關谷健哉

「若し船といふものがないとしたら」と、私は嘗て亂暴な假定を設けて話したことがある。その恐るべき「若し萬が一」が、今や我が國に嚴然たる事實となつて現はれた。船と船乘に對するわが國民の認識不足そのものが、今度の敗戦の一原因であつたともいへるだらう。しかしそれはとにかくとして、今日唯今でも、米國から約百萬トンの船を貸して呉れた、それがどんなに有難いことなのか、さうして貰へなかつたら外地からの同胞の引揚も復員も全く出来ない、のみならず國民は飢饉に陥るといふことを、一般の人達ははつきり解つてゐるのだらうか。戦争で船乘の死者病傷者の率が軍人よりも多かつたこと、いま米國の貸與船を運航しつゝあるのが全部日本の船乘であることなどを、果してどれだけの人が知つてゐるだらうか、恐らく戦前よりは幾許か多い程度に過ぎないだらう。二月九日聯合軍總司令部のサムス大佐が「日本の貧弱な國土で現在の人口を養ふに

は日本の食糧生産は不足である」と述べ、これを解決するため次の三策を挙げたことは萬人の知るところである。

- 一、日本は食糧を輸入するため工業品を輸出し得るやう高度に工業化された産業組織を持つこと
- 二、日本過剰人口の海外移民
- 三、産兒制限措置の實施

大佐の言は、消極的な第三策と併行して第一第二の解決策が實行されてはじめて日本民族が地球上に生存し得ることを意味する。こゝでも亦必然的に船と、それを運航する船乘が問題になる。それを直感するほどの者が果してどれだけあるだらう。船がありそれを動かして船乘が運べばこそ、日本民族は喰べかつ生きて行かれるといふ事實が、これ程明確になつても、わが國の上下は豫想外に海には無關心で、未だにより多く汽車に乗れないことを氣にしてゐる。そしてその困難の一大原因が、亦船不足の結果であることには一向想ひ及ばない様子である。このやうな世人の無理解の原因の一部が、若し今迄船乘は陸上であまり口をきかなかつた、喋べれなかつた、あるひは書くのを嫌

目次

發刊の辭	關谷健哉
まづ知らしめる爲に	關谷健哉
民主主義と學園	江川 朗
一つの對話	山田桂三
天皇制について	米田 尚
寮則委員會だより	生駒謙造

つた、書けなかつたことであつたとしたら、さうであつた當の船乘自身が責任の一端を負はねばならぬ。海運の國家的使命を解せよ、海上生活の特殊性を認めよ、高度に船乘を優遇せよと叫ぶ前に、我々は不斷に積極的 に世人の啓蒙に努むべきである。體驗を通じ強力に懇切に進んで知らしめない限り、眼のとどかない洋上のことを陸上人、即ち殆んど全部に近い世人が知らないのである。いのも一應は無理もないことなのだから。

海上人が、筆と口の力を有効適切に發揮することを怠りながら仲間同志でこぼしたり、口惜しがつたり、僻りりするものは正しくない。なるべく數多くの者がこの紙面を活用し、正しく傳へよく知らしめ、大いに論じ堂々と主張し得る素地を作つて行き